

マレーシア海外教育旅行現地調査報告

市立札幌大通高等学校

教諭 大畑 真人

平成28年7月30日(土)～8月3日(水)に「マレーシア海外教育旅行現地調査事業」が行われました。この度、この事業に参加する機会を得ましたので、そこで見聞きした海外教育旅行先としてのマレーシアの魅力について報告します。

●海外教育旅行の価値

今回の研修で感じたことで最も大きいものの一つが「高校生のうちに海外で貴重な経験を経験することが何物にも代えがたい大きな価値を生む」ということです。私は今回の研修で、そのような経験が世界観、人生観の転機となり、学習に対するモチベーションを大きく変え、その生徒の生き方を大きく変えたという例をいくつも耳にしました。例えば、今回我々を引率してくださったマレーシア政府観光局の徳永氏は、高校の時に海外派遣団としてマレーシアを訪れ、代表として「東南アジアと日本の発展に力を尽くす」とスピーチしたことがその後の人生の転機になったと語ってくださいました。現地ガイドのファイズ氏はマレーシア政府のルックイースト政策で鳥取県の米子高専を卒業し、日本に恩返しをしたいという思いで現在のお仕事についています。H I S添乗員の坂梨さんも高校時代の海外研修が大きな転機になったとおっしゃっていました。まさに「鉄は熱いうちに打て」です。

●経済成長を続ける国家

日本の経済成長は停滞して久しいのですが、マレーシアは今も目覚ましい発展を続けています。クアラルンプール市内にはかつて世界一の高さを誇ったツインタワーをはじめ、多くの超高層ビルが立ち並んでいます。また、市内のいたるところでさらに多くの建設中で超高層ビルを目にすることができます。原油価格の下落や人件費の高まりによって国際競争力が落ちているとはいえ、日本よりも競争力で上位に位置しており、今も発展を続けています。国家戦略として日本をはじめとする海外資本を積極的に取り入れ、発展してきたマレーシアの様子は世界経済のダイナミックな動きを感じることができます。

●多様な文化が共存

マレーシアは68%がイスラム教徒のマレー系、仏教徒の中国系が24%、ヒンズー教徒のインド系が7%と多民族・多文化国家です。国教はイスラム教と定められており、国立のモスクも多数ありますが、他の宗教についても信仰の自由が認められており、それぞれの寺院が建てられています。食文化も民族・宗教によって異なり、マレー料理はココナッツミルクと唐辛子を多用しますが豚は一切使わずアルコールも口にしません。インド料理は、基本カレー味で牛は一切使いません。中華料理はおなじみの味で何でも食べます。

今回の現地調査でも様々な文化の料理を口にし、その違いを知ることができました。マレーシアでは、このように信仰する宗教も食文化も異なる人々が、お互いを尊重することで大きな発展を遂げている様子を肌で感じるすることができます。マレーシアは、異文化交流や国際理解を学ぶのに非常に適した国であると思います。

● ツールとしての英語

マレーシアの第一言語はマレー語ですが、多様な民族が共存していることやかつてイギリスの植民地となっていたこともあり、英語が第二言語となっています。また、家庭では中国語やヒンズー語を話したり、マレー系の学校ではアラビア語も学習するため、バイリンガルで当然、トリリンガルも珍しくないという状況です。このことが、多くの外国資本や高等教育、観光客を受け入れる土壌になっていることは間違いありません。母国語が英語の国では英語が話せるのは当然と受け止めてしまう生徒にも、マレーシアであれば、国際的な教育・研究やビジネスにおける英語の必要性を肌で感じさせることができます。

● 大学教育

今回の視察旅行では、マラヤ大学とマレーシア日本国際工科院を訪問させていただきました。

マラヤ大学はマレーシアで最も古く権威のある大学で国際ランキングでも150位以内に入っている超名門校です。他のマレーシアの大学同様、ほとんどの講義は英語で行われており、世界52か国から800名程度の留学生、60か国以上の国から850名程度の研究者が集まっています。留学生のための寮や下宿、英語合宿プログラムも用意されており、ぜひ日本の高校生にも進路先として考えてほしいとおっしゃっていました。

マレーシア日本国際工科院は、マレーシアの大学教育に日本の優れた技術と教育および研究の手法を取り入れることを目的にマレーシア政府と日本政府の共同事業としてマレーシア工科大学内に2011年に開学しました。現在26名の教授陣が日本から派遣されており、66億円の円借款によって最新の研究機材が揃えられているそうです。こちらでも講義はもちろん英語で行われており、2～3週間程度の日本の大学生の語学研修も受け入れているそうです。また、日本のSSHの訪問を年5組以上受け入れており、こちらでテーマ発表を行うこともあるそうです。なお、こちらに留学するには、公式でTOEFLで550点以上、それ以下の場合は集中英語コースを受ける必要があるそうですが、学費、生活費も比較的安く、日本人スタッフが常にいるのでぜひ留学先として考えてほしいとのことでした。

これは日本大使館で伺った話ですが、日本の大学で世界ランキング200位以内に入っているのは旧7帝大と東工大の8校です。これに対しマレーシアはマラヤ大学の1校のみですが、これ以外に世界ランキングで東大よりも上位のシンガポール国立大学をはじめ200位以内の5校がマレーシア国内に分校を置いたり、編入の受け入れやマレーシア国内で学位を取得できる「ツイニングプログラム」の提携校になっています。マレーシアの人口が3000万人と日本の約4分の1であることを考えると、もはや教育大国といっている状況です。世界各国から多くの留学生を集めているのは単に英語で講義を行っているからだけではありません。マレーシアはこのように積極的に外部の力を取り入れることで発展を続けています。なお、日本からも東京理科大が分校を設置する動きがあったそうですが、採算の問題とマレーシアの法律上、現地法人として大学を置く必要があり、その場合日本の法律上、日本の大学の学位が出せないという問題が解決できずに断念したそうです。

このような教育のグローバル化の現実を知ることは進路選択の視野を広げるのに非常に有益であると思いました。

●ブラザー&シスタープログラム

教育旅行でマレーシアを訪れた日本の高校生に現地の大学生がついて小グループで市内観光をするというプログラムがあるということです。心理的な安心感や安全確保、英語でのコミュニケーション能力の向上などに効果的なプログラムだと思いました。

●日本に対する目

かつてマレーシアは急速に経済成長を遂げた日本に学ぶために「ルックイースト政策」を打ち出し、多くの留学生を日本に送りました。現在、かつての留学生は様々な場所で活躍しており、日本とマレーシアをつなぐパイプ役がいたるところにいるという状況になっているそうです。また、日系企業の進出も著しく日本は最大の対マレーシア直接投資国だそうです。このため国全体が非常に親日的で、日本人が住みたい国9年連続1位になっています。

一方、マレーシアから見た日系企業は社員研修は良くても給与が低く、あまり魅力的には映っていないようです。そのため、新入社員研修が終わった時点で待遇のいい外資系企業に転職する人も多いそうです。日系企業について、マレーシア日本国際工科院も日本大使館も同じ見解を持っているのが印象的でした。

●カンポンビジット（農村体験）プログラムとマレー式結婚式

マレーシアの代表的な体験プログラムにカンポンビジットがあります。このプログラムは農村で宿泊を伴うホームステイをするのが基本ですが、今回、日帰りで実際の結婚披露宴に参列し、ホームステイ先の視察を行いました。

マレー式の結婚披露宴は、新郎側、新婦側のそれぞれの実家で800名～1000名程度の人を招いて行われます。来客は特に招待されていなくても結婚相手の顔を見にやってきてビュッフェ式の食事を食べて食事代相当のお金を置いて自由に帰っていいというスタイルのようです。今回、我々が参列した結婚披露宴は、新郎側の実家で行われたものでした。まずは、民族衣装に身を包んだ新郎・新婦とともに太鼓を打ち鳴らす人々とともにパレードをします。ここで驚いたのが我々を新郎新婦のすぐ後ろに並ばせたことです。正直、縁もゆかりもない外国人なのでパレードを横から眺めるくらいでよかったのですが、恐れ多くも最前列での参加に戸惑ってしまいました。その後も新郎の両親に「よく来てくれた」と握手を求められたりと、日本では考えられない歓迎ぶりでした。このようなことはよくあるそうで、我々以外にもシンガポールから観光客が披露宴に参加していました。

ホームステイ先の視察で分かったことですが、ホームステイを受け入れることのできる家庭はマレーシア政府の認可を受けており、安心して生徒を任せることができるということです。特に我々が訪れた家庭は、表彰も受けているような家庭でリゾートのコテージのようなところでした。

また、ゴムの樹液の採取やアブラヤシの収穫を見学させていただきました。マレーシアの主要産業はすでにサービス業と製造業にシフトしていますが、天然ゴムは世界6位、パーム油は世界2位の生産量を誇ります。特にアブラヤシは、国土の15%を占めるほど盛んに栽培されており、マレーシアを代表する作物となっています。

●イスラム教に対するイメージ

最近の世界的なテロに関する報道によって、イスラム教徒に対して排他的で危険なイメージを持っている人も多いと思います。しかし、マレーシアで現地の人と接すれば、そのイメージはすぐに払拭できると思います。これはマレーシアの人々にお互いを尊重する気質があったということと合わせて観光立国となるために国が啓蒙活動を行ったこと、ルックイースト政策として日本に多くの留学生を派遣したこともあり、極めて親日的であることなども影響していると思います。

●宿泊施設

今回、1・2泊目はセリ・パシフィックホテル、3泊目はルネッサンスホテルに宿泊しました。どちらも日本の高校生の見学旅行を受け入れた経験が豊富で部屋も広く、エクストラベッドなしのツインルームを保障してくれます。日本ならば見学旅行で使うには豪華すぎるホテルですが、物価の違いから一泊5～6千円から宿泊できるそうです。また、市内には24時間の救急病院も日本語の通じる病院もあり、日本の見学旅行で宿泊するホテルと同等のサービスはすべて受けられるということです。

●現地高校生との交流

今回は、見学することができませんでしたが、見学旅行や研修旅行で訪れた高校の中には現地の高校生との交流を行っているところもあるそうです。ただ、日本の高校生の英語レベルは、現地の小学校4年生程度しかないため討論などは難しいということでした。

●気候

熱帯雨林気候なのでかなり蒸し暑く、長時間の外での活動は熱中症の危険があります。逆に、室内は、クーラーを効かせることが「おもてなし」という考えもあるようで半袖では肌寒く感じるほどです。雨が日中に降ることはほとんどなく、夕方に激しいスコールがあったとして20分～30分で止んでしまいます。

●衛生面

ホテルやレストランで食事をする分には、全く問題はありません。もちろん水道水は飲みません。屋台で食べるときは、その場で火を通すものなら問題ありませんが、作り置きのものには注意が必要です。また、カンポンビジットでは特にゴム農園で大量の蚊が発生していました。また、場所によってはデング熱が多発しているところもあるそうなので虫よけは必須です。

●コスト

今回、お世話になったHISの話ではマレーシアでの海外研修は最低12万円から実施の可能性があるそうです。15万円の予算があれば、今回のように充実した研修を実施できるそうです。個人的には費用対効果を考えた時に10万円で実施する国内の見学旅行と比較して生徒の意識改革の大きさなどを考慮するとそれ以上の価値があると思いました。